

親鸞さまの

【本文】

ぶつち ぎわく
仏智を疑惑するゆゑに

たいしやう
胎 生のものは智慧もなし

たいぐ
胎宮にかならずうまるるを

ろうごく
牢 獄にいとたとへたり

【意識】

阿弥陀様のご観点を抛り所にしない
(自分の観点を抛り所にする)なら
ば、

その人が選んだ通りの行く末とな
り、極楽浄土から外れた所がその趣
(おもむ)く先になります。自分を何
よりの抛り所にするために、阿弥陀
様の観点がありません。

それは、自分の心と思考の中だけで
堂々巡りする姿であり、

喩えて言えば、牢獄にあるような行
き場のない姿です。

【私の味わい】

たきぎ いだ
薪を抱きて火を救う、という故事成語があるようです。火を消そうとして薪を
持つていき、かえって火の勢いを増してしまうことの愚かさを表した言葉だと知りまし
た。薪を火の側に持つていったら燃え広がる、火を消す正しい方法は水を持つていくこと
である、これは誰もが知っていることです。そもそもが方法を間違っているし、加えて燃
えやすいものを持つているという自覚もなく、結果も見えていないという三重の誤りを
おかしています。このように理屈立てて考えれば、そんな道理に外れたことをする人が
いるのだろうかと言ふが、訝 しまずにはいられません。歴史上のお話(中国の春秋戦国時代
に君主の誤りを指摘した側近の言葉)を基にこの言葉が成り立っていることから、他
人事とは片付けられそうもありません。

阿弥陀様のお心を日頃からよくよく聞かせて頂き、お念仏して極楽浄土に往かせて
頂く。浄土真宗の教えはこれだけです。言い方を換えれば、学歴、知識、財産、社会的
地位など世間の営みの一切は、お浄土往きの道筋とは直接関わりはありません。どん
な半生を送ってきた人でも、阿弥陀様のお心を聞き深め続ける人こそが、阿弥陀様の
お心の延長線上の人生を生きていくのです。一方、そうでない場合はそうでない道筋を
歩んでいくでしょう。それは、自らの選択の結果であり、ご縁の問題でもあるのです。
もしかすると、そもそも方法を間違っているのではないか、そのこと自体に気付いて
いないのではないか。その振り返りは、法話を聞く中でのみ可能なのです。(悠水)